

陰画としての学校教育

―「坊っちゃん」は如何にして元祖学園ドラマとなったか―

村 瀬 士 朗

はじめに

「坊っちゃん」は夏目漱石の作品の中でもとりわけよく知られた作品である。たとえ読んだことは無くても、日本人ならおそらくだれもがその題名を聞いたことがあるだろう、まさに「国民文学」と呼んでよい作品である。

「坊っちゃん」が「国民文学」¹⁾であるとは、単にそれが現在に至るまで長く読まれ続けているという事実だけに由来することではない。「坊っちゃん」という物語の枠組み＝話型は、その後の日本における物語の原型の一つとなつて受け継がれ、「坊っちゃん」を祖型とする物語は、いまだに生産され続けている。「坊っちゃん」を読んだことが無くても、作品のおおまかな筋や人間関係、あるいは主人公の性格や行動について、なんとなく知っているような気がするの、私たちがそのような「坊っちゃん」を祖型とする「坊っちゃん」型の物語に、どこかで接しているからなのである。伊藤整²⁾は「坊っちゃん」の作中人物に典型的な「日本人の諸性格」を見たが、

正確にはそれは「日本的物語キャラクター」の典型といふべきであろう。単なる一作品の影響というレベルを超えたそのような受容のありようこそが、「坊っちゃん」が「国民文学」である所以なのである。

本論はそのような「坊っちゃん」型の物語の典型として、いわゆる学園ドラマと呼ばれる一連のテレビドラマを取り上げ、「坊っちゃん」との比較検討を行うことで、本来、反・学園ドラマ³⁾というべき性格を持った「坊っちゃん」が、元祖学園ドラマとして読み換えられていくのはなぜかについて考察する。「坊っちゃん」の受容をめぐるそのような反転は、学校教育の外部としての人間教育を担うべき場として、「文学」の社会的価値が立ち上げられていく仕組みを明らかにするはずである。

キーワード…「坊っちゃん」、学園ドラマ、学校教育、学校小説、「文学」の社会的価値の構築、人生の教育者

1、青春学園ドラマの構造

学園ドラマと呼ばれる一連のテレビドラマの出発点となったのは、一九六五年から一九六六年にかけて放送された『青春とは何だ』に始まる日本テレビの青春学園ドラマシリーズである。一九七九年から一九八〇年に放送された『あさひが丘の大統領』まで一五年で一五作品が作られ、夏木陽介から宮内淳まで一〇名の若手俳優が主人公の新任教師を演じて「青春スター」となった。

日本テレビのシリーズが終了するのに重なるように、一九七九年から一九八〇年にかけて武田鉄矢主演の『3年B組金八先生』³⁾が放送される。『3年B組金八先生』は二〇一一年三月の『3年B組金八先生ファイナル』「最後の贈る言葉」4時間スペシャル⁴⁾まで、実に三〇年を越えるロングシリーズとなったが、この間、中高生を中心とする視聴者向けの定番ジャンルとして、数多くの学園ドラマが制作され放送された。

時代によって変化はあるものの、これらの学園ドラマにはおおむね共通する話の枠組みが見られる。頭の固い校長や教頭などの学校の管理職によって支配し管理され、規則によって縛られて硬直している学校に、型破りの新任の熱血教師がやってきて、硬直した秩序に風穴を開け、生徒たちに自由をもたらしというストーリーだ。管理職⇨大人対新任教師と生徒⇨若者という新旧両世代の対立の構造を基本とする新任教師と生徒の「心の交流」というテーマ。そして型破りで秩序破壊的なトリックスターとしての新任教師という主人

公。金八先生の長髪から「GTO」⁵⁾や「ドラゴン桜」⁶⁾、「ヤンキー母校に帰る」⁷⁾などの元暴走族という経歴にいたるまで、時代や演出によってその表現の仕方には様々なバリエーションはあるものの、基本的な設定と物語の枠組みはおおむね共通しているといえる。⁸⁾

こうした学園ドラマの物語的な特徴は「坊っちゃん」にも顕著に見られる。赴任した「坊っちゃん」に校長が与える「御談義」(二)は硬直した教育理念に凝り固まった頭の固い管理職の性格を端的に表している。

校長は時計を出して見て、追々ゆるりと話す積だが、先づ大体の事を呑み込んで置いて貰はうと云つて、夫から教育の精神について長い御談義を聞かした。おれは無論い、加減に聞いて居たが、途中からは飛んだ所へ来たと思つた。校長の云ふ様にはとても出来ない。おれ見た様な無鉄砲なものをつらまへて、生徒の模範になれの、一校の師表と仰がれなくては行かんの、学問以外に個人の徳化を及ぼさなくては教育者になれないの、と無暗に法外な注文をする。

(二)

この「御談義」を聞かされた「坊っちゃん」は「到底あなたの仰やる通りにや、出来ません」(二)と云つて辞令を返そうとする。校長は「狸の様な眼をぱちつかせ」(二)で驚くのだが、ここにはすでに頭の固い管理職と常識破りの新任教師の破天荒な言動とい

う、学園ドラマに見られる典型的な構図が明瞭に表れている。以下、宿直の日の「バツタ事件」、下宿をめぐる「山嵐」との喧嘩、職員会議での乱暴な発言、「うらなり」の送別会での「野だ」への殴打など、「坊っちゃん」は次々と騒動を起こしてトリックスターを演じ続け、それがこの作品の爽快感を生む要因になっている。

新潮文庫の「坊っちゃん」のブックカバー裏表紙には「物理学校を卒業後ただちに四国の中学に数学教師として赴任した直情径行の青年。坊っちゃん^がが、周囲の愚劣、無気力などに反撥し、職をなげうって東京に帰る。主人公の反俗精神に貫かれた奔放な行動は、滑稽と人情の巧みな交錯となつて、漱石の作品中最も広く愛読されている」という解説文が載っている。

新潮文庫版がおそらく最もよく読まれた「坊っちゃん」のテキストであることを考えれば、ここには「坊っちゃん」という作品に関する最大公約的なイメージが表れていると見ることが出来るだろう。「物理学校を卒業後ただちに四国の中学に数学教師として赴任した」新任教師、「周囲の愚劣、無気力などに反撥」する「直情径行の青年」の「反俗精神に貫かれた奔放な行動」、ここには学園ドラマのステレオタイプに通じる特徴が明瞭に表れている。それゆえ「坊っちゃん」は「漱石の作品中最も広く愛読されている」。「坊っちゃん」は学園ドラマの祖型となることで「国民文学」となったのだ。

2、^{アシテ}反・学園ドラマ

しかし構図が似ているだけに、比較をすると、むしろ「坊っちゃん」には学園ドラマを構成する重要な要素が決定的に欠けていることが浮き彫りになってくる。

一つは「坊っちゃん」が学園ドラマの主人公のような「熱血教師」ではない点である。初めでの出講日、二時間目の授業に臨む心境を「何だか敵地へ乗り込む様な気がした」(三三)と語っていたように、「坊っちゃん」にとって生徒たちは討ち果たすべき「敵」として捉えられている。「喧嘩なら相撲取とでもやつて見せるが、こんな大僧を四十人も前へ並べて、只一枚の舌をた、いて恐縮させる手際は無い」(三三)というように、「坊っちゃん」は授業を「敵」である生徒を「恐縮させる」「喧嘩」と考えているのである。「こんな田舎者に弱身を見せると癖になる」(三三)「まるで豚だ」(四)「こんな土百姓とは生れからして違ふ」(四)という敵意むき出しの「坊っちゃん」の生徒への感情に見られるのは、自分と生徒を徹底して差別化し、異質な他者として切り離そうとする欲望である。その意味では従来「坊っちゃん」を読み解くためのキーワードのように論じられてきた「江戸っ子」と「田舎者」、「旗本(武士)」と「土百姓」という二項対立に見られる地方差別や土族意識というものも、「人間」と「豚」という二項対立と同様、生徒を自分と差別化し、自己の優位性を保つための心理的操作に過ぎないということもできる。「坊っちゃん」は自分と生徒を上下、正邪の關係に置くために、あ

らゆる二項対立を動員しているのである。

こうした「坊っちゃん」の生徒に対する関係の持ち方が持つ、教師のあるべき姿についての一般的な理想像とのずれがよく表れているのが、「バツタ事件」に関する生徒の処分を議題とする職員会議の場面における「坊っちゃん」の発言である。

「一体生徒が全然悪いんです。どうしても詫まらせなくつちあ、癖になります。退校しても構ひません。……何だ失敬な、新しく来た教師だと思つて……」

(六)

「坊っちゃん」の発言は、相手の悪を摘発し、断罪し、殲滅することだけに向けられている。「おれは生徒をあやまらせるか、辞職するか二つのうち一つに極めてるんだから、もし赤シャツが勝ちを制したら、早速うちへ帰つて荷造りをする覚悟で居た」(六)というように、「坊っちゃん」にとって会議での議論は、対立する「敵」との「勝負」として認識されているのである。

こうした「坊っちゃん」の発言の特異性は、同じ会議での「山嵐」の発言と比較してみるとよくわかる。

「私は教頭及び其他諸君の御説には全然不同意であります。と云ふものは此事件はどの点から見ても、五十名の寄宿生が新来の教師某氏を軽侮して之を翻弄し様とした所為とより外には認

められんのであります。教頭は其原因を教師の人物如何にお求めになる様でありますが失礼ながら夫は失言かと思ひます。某氏が宿直にあたられたのは着後早々の事で、未だ生徒に接せられてから二十日に満たぬ頃であります。此短かい二十日間に於て生徒は君の学問人物を評価し得る余地がないのであります。軽侮されべき至当な理由があつて、軽侮を受けたのなら生徒の行為に斟酌を加へる理由もありませんが、何等の原因もないのに新来の先生を愚弄する様な軽薄な生徒を寛假しては学校の威信に関はる事と思ひます。教育の精神は単に学問を授ける許りではない、高尚な、正直な、武士的な元気を鼓吹すると同時に、野卑な、軽躁な、暴慢な悪風を掃蕩するにあると思ひます。もし反動が恐しいの、騒動が大きくなると姑息な事を云つた日には此弊風はいつ矯正出来るか知れません。かゝる弊風を杜絶する為めにこそ吾々はこの校に職を奉じて居るので、之を見逃がす位なら始めから教師にならん方がいゝと思ひます。私は以上の理由で、寄宿生一同を厳罰に処する上に、当該教師の面前に於て公けに謝罪の意を表せしむるのを至当の処置と心得ます」

(六)

「山嵐」の発言を聞いた「坊っちゃん」はすっかり嬉しくなつてしまい、「おれの云はうと思ふ所をおれの代りに山嵐がすつかり言つてくれた様なものだ」(六)と「山嵐」に感謝の視線を向ける。

確かに「山嵐」の発言は、生徒たちの行為が「新米の教師某氏を軽侮して之を翻弄し様とした所為」であるということ、これを明らかにし、生徒たちを「厳罰に処」し「当該教師の面前に於て公けに謝罪の意を表せしむる」べきであると主張しているという点で、「何だ失敬な、新しく来た教師だと思つて」「一体生徒が全然悪いです」「どうしても詫まらせなくつちあ、癖になります」という「坊っちゃん」の粗雑な発言を、論理的な説得力のある言葉に高めたものであるということが出来る。

しかし両者の発言を読み比べてみれば、そこには教師としての姿勢に決定的な相違があることは明らかである。「坊っちゃん」が生徒を「敵」として見て、職員会議の議論を勝ち負けという基準からしか考えていないのに対して、「山嵐」の発言の目的は生徒たちの「悪風」を「掃蕩」し、「弊風」を「矯正」することにある。「坊っちゃん」の発言には、「山嵐」の発言の核心である、この「教育の精神」が決定的に欠けているのである。

こうした「坊っちゃん」と「山嵐」の教師としての生徒に対する姿勢の相違は、教師という仕事に関する職業観にも表れている。「か、る弊風を杜絶する為めにこそ吾々はこの校に職を奉じて居る」、「之を見逃がす位なら始めから教師にならん方がい、」というように、「山嵐」は生徒の非を正し処分を与えて反省を促すことで彼らを矯正し善導することに、教師の使命と教育の意義を見出している。しかし「坊っちゃん」には教師という職業それ自体に対するそのような使命感や熱意が決定的に欠けている。「坊っちゃん」は

教師になった経緯を次のように語っていた。

卒業してから八日目に校長が呼びに来たから、何の用だらうと思つて、出掛けて行つたら、四国辺のある中学校で数学の教師が入る。月給は四十円だが、行つてはどうだ、という相談である。おれは三年間学問はしたが実を云ふと教師になる気も、田舎へ行く考へも何もなかつた。尤も教師以外に何をしようと思つてもなかつたから、此相談を受けた時、行きませうと即座に返事をした。是も親譲りの無鉄砲が祟つたのである。

(一)

ここには給与と勤務地という、つまり労働条件のことしか語られていない。「坊っちゃん」にとつて教職とは、他の職業と交換可能な単なる生活の手段に過ぎないのである。

中野綾子は学園ドラマ創世記である一九六〇年代から七〇年代にかけての学園ドラマの主人公たちが「教師という職業に心底憧れて教壇に立った」「仲間の団結と将来に向けた努力を生徒たちに説く、まっすぐで熱い人物だった」と述べている¹⁰⁾。中野は一九八〇年代以降のドラマでは「学園は必ずしも理想を追い求める場所ではなくなり」、教師像も「アウトロー」や「元不良、元暴走族」へと変化すると述べているが、そうした変化にもかかわらず、教師という職業への使命感と生徒との連帯という、創世記の学園ドラマに見られた二つの特徴は、現在にいたるまで大きく変わるところはないという

べきだろう。確かに一九八〇年代以降の学園ドラマでは、必ずしも教師になりたくてなったわけではないという主人公の設定もあったし、教育への熱意や生徒への愛情を欠いた教師も登場している。しかしそのような設定は、あくまで最終的に教職に対する使命感や生徒との連帯に到達するまでのプロセスなのであり、むしろ教職と教育の価値を高めるための仕掛けとなっているのである。

3、成長のテーマと教育の可能性

そもそも対立と衝突から理解と連帯に至るといふ筋立ては学園ドラマの典型的なパターンである。学園ドラマの多くは主人公である新任教師が学校に赴任するところから始まり、退職や転出などで学校を去るところで閉じられるという、出会いと別れという枠組みを持っている。どのドラマにもほぼ共通しているのは、その出会いから別れに至るプロセスの中で、最初に主人公と生徒の衝突が描かれ、やがてそれをきっかけにして両者の間に理解と共感が生まれ、一体となった両者の連帯が閉塞していた学校の状況を変化させる、という一連のストーリーである。主人公と生徒の衝突は理解と連帯にいたるためのイニシエーションなのであり、この一連のプロセスの中で主人公と生徒の双方に、それまでの自己のあり方に変化が起こり、「成長」がもたらされるといふのが学園ドラマの基本的な構造であり、物語のテーマなのである。

それはまさしく子供から大人への変化⇨成長を促す「学校」とい

う場にふさわしいストーリーでありテーマであるといふべきであろうが、そのような学園ドラマの特徴を踏まえてみると、「坊っちゃん」の異質性は際立っている。

新任教師の赴任に始まり退職に終わるといふ枠組みの点では「坊っちゃん」も学園ドラマと同じ構造を持っており、赴任してきた新任教師が着任早々生徒たちと衝突して騒動を起こすという設定も共通している。最初の授業日、授業の帰りがけに生徒から解けずもない幾何の問題を解釈してくれと質問を受けた「坊っちゃん」は答えに窮し、生徒から「出来ん／＼」(三)と囃したてられる。難問を解かせて新任の教師の力量を測ろうとする生徒の行為が、新たに共同体に加わろうとする者に課されるイニシエーションの意味を持っていくことは明らかである。学園ドラマの主人公と生徒の衝突も、両者が理解と連帯に到るためのイニシエーションの意味を持っていく。最初は反感から激しく衝突するが、衝突することで相手を理解して認めることができるようになり、共感が生まれて主人公と生徒たちが連帯するというのが学園ドラマのパターンだった。しかし「坊っちゃん」では「坊っちゃん」と生徒たちの衝突は、理解と連帯をもたらさない。宿直の日に起こった騒動「バツタ事件」を見てみよう。

「なんでバツタなんか、おれの床の中へ入れた」

「バツタた何ぞな」と真先の一人がいつた。やに落ち付いて居やがる。此学校ちや校長ばかりぢやない、生徒迄曲りくねつ

た言葉を使ふんだらう。

(中略)

おれはバツタの一つを生徒に見せて「バツタた是だ、大きなずう体をして、バツタを知らないた、何の事だ」と云ふと、一番左の方に居た、顔の丸い奴が「そりや、イナゴぞな、もし」と生意気におれを遣り込めた。

(四)

同じ虫のことを「バツタ」と「イナゴ」という別の言葉で呼ぶという平行線を描く形で、「坊っちゃん」と生徒たちの対立が示されているのは象徴的である。「坊っちゃん」は、最初の授業日に、説明が早すぎてわからないからもう少しゆっくり話してくれという生徒の要望に、「おれは江戸っ子だから君等の言葉は使へない。分らなければ、分る迄待つてるがい、」(三)と突っぱねていた。「坊っちゃん」と生徒は双方とも、決して同じ言葉を共有しようとはしないのである。

平行線を描いたまま決して交わることがない両者の関係によってもたらされるのは、衝突と対立というイニシエーションを経ることによってもたらされる成長と教育の価値の発見という学園ドラマのテーマとは正反対の、学校に対する不信感と教育への失望であった。

全体中学校へ何しに這入つてるんだ。学校へ這入つて、嘘を吐

いて、胡魔化して、蔭でこせく生意気な悪いたづらをして、さうして大きな面で卒業すれば教育を受けたもんだと癩違をして居やがる。

(四)

「坊っちゃん」という作品が本来持っているそのような性格と、元祖学園ドラマという受容のされ方のギャップがよく表れているのが、「坊っちゃん」が映画やテレビドラマにされる際に必ずといってよいほど行われる「坊っちゃん」が任地を去るシーンにおける改変である。

「赤シャツ」と「野だ」に「山嵐」と共に「天誅」を加えた「坊っちゃん」は、下宿に帰つて荷物をまとめると港町の宿屋で「山嵐」に合流し、その日の夜に船に乗って任地を離れる。「坊っちゃん」は勿論、「一番生徒に人望がある」(二)という「山嵐」の辞職が決まっても生徒は反応を示すこともなく、二人を見送りになど来ないのである。

ところが映画やテレビドラマ化された「坊っちゃん」では、ほとんどの場合このシーンに生徒が登場し、「坊っちゃん」と「山嵐」を見送る形への改変が行われる。一例として一九九四年にNHKで放送された内館牧子脚本の「坊っちゃん—人生損ばかりのあなたに捧ぐ」を検討してみよう。このドラマでは「坊っちゃん」と「山嵐」が「赤シャツ」と「狸」の不正を暴くことを相談する場面で、「山嵐」が生徒たちに招集をかけることを提案する。「おれたちだけで十分

だ」という「坊っちゃん」に対して「山嵐」は「十分だけでも招集かける。本当に悪い奴を生徒の目の前で暴いてやる」と答え、「坊っちゃん」は笑顔を見せて「山嵐」の提案に賛成するのである。一連の騒動の後、辞職することになった「坊っちゃん」は最後の授業で生徒たちにメッセージを伝え、「おれは本当におまえらと会えてよかった、ありがとう」と礼を述べ、生徒とともに涙する。最後の場面は任地を去る「坊っちゃん」と「山嵐」をマドンナと生徒たちが見送りに来るという形で閉じられ、最後に「坊っちゃん」の「世の中というのは、決して捨てたもんじゃない」という独白が映像に重ねられてエンドロールが流れる。

このラストシーンが学園ドラマの主人公と生徒たちの別れのシーンのパターンに仕立てられていることは明らかだろう。そもそも「坊っちゃん」では任地を去る場面はラストシーンではなく、「坊っちゃん」が東京に帰って清に再会し、「坊っちゃん」と家を持つという念願を果たして亡くなった清の臨終の言葉が引用され、それに答える「だから清の墓は小日向の養源寺にある」(十一)という言葉で作品は閉じられている。「坊っちゃん」という作品を枠付けているのは清との関係なのであり、映画やドラマ化された「坊っちゃん」は原作から中学校での出来事だけを抽出し、新任教師と生徒の出会いと別れという学園ドラマの枠組みによって仕立て直して物語化しているのである。

対立と衝突というイニシエーションを経て理解と連帯にいたる主人公の教師と生徒の変化⇨成長が学園ドラマのテーマであることを

考えるとき、「坊っちゃん」が自分が変化することを拒んでいると同時に、生徒を変えようと考えていないこと、生徒が変わりうるという可能性を全く認めていないという点が注目される。

おれは宿直事件で生徒を謝罪さして、まあ是ならよからうと思つて居た。所が実際は大違ひである。下宿の婆さんの言葉を借りて云へば、正に大違ひの勘五郎である。生徒があやまつたのは心から後悔してあやまつたのではない。只校長から、命令されて、形式的に頭を下げたのである。商人が頭許りさげて、狡い事をやめないので一般で生徒も謝罪文はするが、いたづらは決してやめるものでない。

(中略)

こんな卑劣な性は封建時代から、養成した此土地の習慣なんだから、いくら云つて聞かしたつて、教へてやつたつて、到底直りつこない。

(十)

変化の可能性を否定することは教育の可能性の否定へと繋がっている。「バツタ事件」で「山嵐」は生徒を「矯正」しようと懲罰を与えることを提案し、生徒は「坊っちゃん」に謝罪した。処罰による教育によって生徒の変化と成長が期待されていたのである。ところが処分は下されたものの結局生徒は何も変化せず、処罰が何の教育にもなっていないことに「坊っちゃん」は気付かされてしまう。

「いくら云つて聞かしたつて、教へてやつたつて、到底直りつこない」という認識は、「坊っちゃん」の教育への深刻な失望感を表している。「坊っちゃん」では「坊っちゃん」と生徒の衝突は、学園ドラマのように両者を変化¹¹成長させるイニシエーションとはならず、両者の反目と対立を強化する機能しか持たない。平行線を描いたまま決して交わることがない「坊っちゃん」と生徒の関係は、変化と成長の可能性への懐疑と、教育への失望感を表現しているのである。

4、劣等生とエリート

学園ドラマと「坊っちゃん」を比較する上でもう一つ見逃せないのが、作品の舞台となる中学校という場が作品発表当時持っていた社会的な位置の問題である。

学園ドラマでは主人公が受け持つことになる生徒たちがいわゆる問題児ないし劣等生である場合が多い。例えば青春学園ドラマの代表としてよく知られた「飛び出せ青春」と「われら青春」の舞台となつている太陽学園高校は、「来るものは拒まない」という校長の方針により無試験入学制度をとっていたので、全国から「落ちこぼれ」が集まり、なかでも主人公が受け持つサッカー部、ラグビー部は劣等生の集まりであるという設定になつてきた。劣等生¹²不良が新任教師との関係を経てやる気を起こし変化¹³成長する、というのが学園ドラマの基本的な枠組みになつているわけで、これは「GT

0」¹⁴「ドラゴン桜」¹⁵「ROOKIES」¹⁶「ごくせん」¹⁷等、その後の学園ドラマでも踏襲されている。

これに対して「坊っちゃん」の舞台である中学校は、作品発表当時進学率がまだわずか数パーセントに過ぎない、学歴エリートの集まる場所であつた。そのような中学生のエリート意識がよく表れているのが師範学校生との喧嘩の場面である。

中学と師範はどここの県下でも犬と猿の様に仲がわるいさうだ。なぜだかわからないが、丸で気風が合はない。何かあると喧嘩をする。大方狭い田舎で退屈だから、暇潰しにやる仕事なんだらう。おれは喧嘩は好きな方だから、衝突と聞いて、面白半分に駆け出して行つた。すると前の方にゐる連中は、しきりに何だ地方税の癖に、引き込めと、怒鳴つてる。後ろからは押せ押せと大きな声を出す。おれは邪魔になる生徒の間をくぐり抜けて、曲がり角へもう少して出様とした時に、前へ！と云ふ高く鋭い号令が聞えたと思つた。師範学校の方は肅々として進行を始めた。先を争つた衝突は、折合がついたには相違ないが、つまり中学校が一步を譲つたのである。資格から云ふと師範学校の方が上ださうだ。

(十)

深谷昌志は明治四〇年代に中学校に進学した場合の必要経費を、通学生で四円五〇銭から五円、寄宿生で一〇円前後と推定してい

る。²⁹⁾ 月一〇円という出費は「帝大を卒業した官僚エリートや大地主などの富裕層にとっては支出が容易であるにしても、師範学校卒業程度の小学校教師や中学校を卒業して官庁入りした中堅官吏にとって、生活をきりつめても支出できる額ではなかった。まして、労働者や自小作農には、一〇円が生活費の総額に匹敵する場合もあっても学費や必要経費を用意できない家庭の子供は中学校への進学をあきらめざるを得ない。そのような貧しい家庭の子供たちの進学先となっていたのが、自治体から補助を受けて授業料が免除になり、修学に伴う費用の一切が学校から支給される師範学校だったのである。「何だ地方税の癖に」という中学生の師範学校生への嘲りの言葉はそのような事情を表している。学校制度上は尋常小学校卒業で進学できる中学校に対して、師範学校は高等小学校を卒業しなくては進学できないことになっていたので、「資格から云ふと師範学校の方が上」と言うように就学年齢からいうと師範学校の方が上であった。しかし師範学校は卒業してもその先がないのに対して、中学校は高校、大学へと更なる高等教育機関に進んで学歴エリートとなる出世コースの中に位置していた。「年は上だけれども地元の小学校の教員になることが決まっている若者達と、年は下だがやがて「立身出世」して中央に進出するつもりである若者達³⁰⁾」という複雑な上下関係の意識がこの喧嘩の背景にはあったのである。

学歴エリートの道を行んでいる中学生にとって、その頂点となるのが帝国大学であり、それを卒業して学士となることが彼らの目標

であった。「坊っちゃん」の任地の中学校で、中学生たちが目指す学歴エリートの頂点、「大学の卒業生」であることが明示されている唯一の人物は、「文学士」である「赤シャツ」である。「坊っちゃん」の中学生たちは、「赤シャツ」のように帝国大学に進学し、学士となる学歴エリートの道を行んでいる、「赤シャツ」予備軍だったのである。³¹⁾

5、「赤シャツ」予備軍としての中学生

先に引用した「バツタ事件」でいたずらをした生徒を詰問する場面で、言葉尻を捕らえて話をすりかえ相手の攻撃をかわそうとする生徒に苛立った「坊っちゃん」は、「此学校ちや校長ばかりぢやない、生徒迄曲りくねつた言葉を使ふんだらう」(四)と生徒の言葉の使い方に校長という権力者との共通性を見出ししていた。宿直でありながら無断外出していた「坊っちゃん」を見咎めながら、「あなたは今日は宿直ではなかつたですかねえ」(四)と事実をストレートに指摘しない、校長の持つて回った言い回しに苛立たされたことを思い出していたのである。その時「坊っちゃん」が「校長なんか・い・や・に・曲りくねつた言葉を使ふもんだ」(四)と感じていたように、「曲りくねつた言葉」の使い手となることは、権力者に成り上がるための条件であった。エリートコースにある中学生たちは立身出世を果たすべく、「曲りくねつた言葉」の学習と実践に励んでいたのである。

帝国大学卒業生という学歴エリートの頂点を極めた「赤シヤツ」こそは、そのような「曲りくねつた言葉」の最高の使い手であった。着任早々の「坊っちゃん」を釣りに誘った「赤シヤツ」は、巧みな言葉で「坊っちゃん」に「山嵐」への疑いの種を植え付ける。「赤シヤツ」はまず、気がかりな言葉だけが途切れ途切れに聞こえる内緒話を「野だ」として見せて、「坊っちゃん」の疑念を掻き立てる。

又例の堀田がとか煽動してとか云ふ文句が気にかゝる。堀田が
おれを煽動して騒動を大きくしたと云ふ意味なのか、或は堀田
が生徒を煽動しておれをいぢめたと云ふのか方角がわからな
い。

(五、傍点原文)

そうしておいて、「学校と云ふものは中々情実のあるもので」「気を付けないと」「思はぬ辺から乗せられる事がある」(五)と親切めかした助言を行った上で次のように言うのである。

「世の中には磊落な様に見えても、淡白な様に見えても、親切に下宿の世話なんかしてくれても、滅多に油断の出来ないのがありますから……。」

(五)

早速翌日「山嵐」と談判に及ぼうとした「坊っちゃん」に、あわ

て「赤シヤツ」が「僕は堀田君の事に就いて、別段君に何も明言した覚はない」(六)と言っているように、語られている言葉の意味だけからすれば、「赤シヤツ」が話しているのは誰にでもあてはまる一般的な忠告に過ぎない。「坊っちゃん」の下宿を世話したのは「山嵐」だが、「赤シヤツ」が言っているのはあくまで下宿の世話などをして親切に見えるような人間でも信用できるとは限らないという一般論でしかないのだ。しかし聞き手である「坊っちゃん」は、「野だ」との途切れ途切れの内緒話を耳にさせられていたことで、意図的に文脈を欠落させたこれらの言葉に、話し手である「赤シヤツ」が読ませようとした意味を讀んでしまう。「曲りくねつた言葉」とは、言葉が意味を結ぶ最終的なコード化の作業を聞き手の側がするように仕向けることで、発言の責任を巧みに回避する言説だったのである。

「坊っちゃん」の下宿をめぐる「赤シヤツ」の一連の言動が、「坊っちゃん」を利用して「山嵐」を辞職に追い込む計略の一環であったことは、「野だ」の行動からもうかがわれる。「坊っちゃん」が下宿を出ると入れ替わりに「野だ」が「いか銀」の下宿に入ったことから推測すれば、「坊っちゃん」が乱暴で困るから下宿を出るよう説得してくれと「山嵐」に頼んだという「いか銀」の背後に「野だ」の動きがあったことが考えられる。「赤シヤツ」は一方で「坊っちゃん」に「親切に下宿の世話なんかしてくれ」「山嵐」は「油断の出来ない」人間だから気を付けろという謎を吹き込んでおいて、下宿をめぐるトラブルをしかけて「山嵐」と「坊っちゃん」の

関係に揺さぶりをかけたのである。「坊っちゃん」と「山嵐」の喧嘩を「野だ丈」が「面白さうに笑つて居た」(六)こと、直後に開かれた職員会議で「野だ」が「山嵐」の隣に座ってしきりに話しかけていることから、それはうかがわれる。

下宿をめぐるトラブルは、この後「山嵐」の「坊っちゃん」に対する誤解が解けることで解消し、二人は信頼関係を結び直すことになる。一旦は「赤シヤツ」の思惑が外れることになったのだが、日露戦争の祝勝会の日、今度は「赤シヤツ」は中学生の弟を使って「山嵐」と「坊っちゃん」を中学生と師範学校生の喧嘩に巻き込み、二人は新聞で生徒を煽動したとして攻撃されることになる。「山嵐」が推測するように「赤シヤツ」が「あ、やつて喧嘩をさせて置いて、すぐあとから新聞屋へ手を廻してあんな記事をか、せた」(十一)のだとすれば、新聞というメディアを巧みに利用した「赤シヤツ」の情報操作によって「山嵐」は辞職に追い込まれることになったのである。

「あんな好物の遣る事は、何でも証拠の拳がらない様に、拳がらない様にと工夫するんだから、反駁するのは六つかしいね」

(十一)

「赤シヤツ」の策に陥れたことに気付いた「山嵐」はそう呻くのであるが、このような「赤シヤツ」の情報操作能力、言語運用

能力を忠実にコピーしていたのが中学生たちの言葉であった。

向でうまく言ひ抜けられる様な手段で、おれの顔を汚すのを抛つて置く、樗蒲一はない。向が人ならおれも人だ。生徒だつて、小供だつて、ずう体はおれより大きいや。だから刑罰として何か返報をしてやらなくつては義理がわるい。所がこつちから返報をする時分に尋常の手段で行くと、向から逆振を食はして来る。貴様がわるいからだ云ふと、初手から逃げ路が作つてある事だから滔々と弁じ立てる。弁じ立て、置いて、自分の方を表向き丈立派にして夫からこつちの非を攻撃する。もとく返報にした事だから、こちらの弁護は向ふの非が拳がらない上は弁護にならない。つまりは向から手を出して置いて、世間体はこつちが仕掛けた喧嘩の様に見做されて仕舞ふ。

(十)

「うまく言ひ抜けられる様な手段で」いたずらを仕掛け、「非が拳がらない」よう「初手から逃げ路が作つてあ」つて、糾弾しようとする逆「こつちの非」が「攻撃」されてしまう。結局は「向から手を出して置いて、世間体はこつちが仕掛けた喧嘩の様に見做されて仕舞ふ」ことになる、という生徒たちの「坊っちゃん」へのいたずらのやり方が、「赤シヤツ」の、「坊っちゃん」を利用した「山嵐」排斥の一連の言動を、見事に模倣していることは明らかだろう。生徒たちはいわば新任教師を実験台にして「曲りくねつた言葉」を

習得するトレーニングをしていたのである。

考へて見ると世間の大部分の人はわるくなる事を奨励して居る様に思ふ。わるくならなければ社会に成功はしないものと信じて居るらしい。たまに正直な純粹な人を見ると、坊ちゃんの小僧だのと難癖をつけて軽蔑する。夫ぢや小学校や中学校で嘘をつくな、正直にしると倫理の先生が教へない方がいゝ。いつそ思ひ切つて学校で嘘をつく法とか、人を信じない術とか、人を乗せる策を教授する方が、世の爲にも当人の爲にもなるだろう。

(五)

中学校に進学するということは、帝国大学を頂点とする学歴ピラミッドに昇りつめるエリート・コースに参入することであつた。そしてその学歴社会の勝者こそが帝国大学卒業生であり、若くして奏任待遇である教頭に昇りつめた学歴エリートの「赤シヤツ」だつたのである。中学生たちの言葉の使い方が「赤シヤツ」のそれを忠実に模倣したような性格を持つていたのは、そのような学歴のサブイバル・ゲームを勝ち抜き、社会の上層部に昇りつめるための条件として、巧みに責任を回避しつつ意のままに他者を操る技術としての言語運用能力、情報操作能力を身に付ける必要があつたからである。その意味で中学校とは、いわば「赤シヤツ」製造工場だつたのである。

6、「教育」の価値の反転

「曲りくねつた言葉」に巻き込まれそうになる時、「坊っちゃん」は反射的に「赤シヤツ」や生徒たちに対立する存在として清のことを想起していた。

考へて見ると厄介な所へ来たもんだ。一体中学の先生なんて、どこへ行つても、こんなものを相手にするなら気の毒なものだ。よく先生が品切れにならない。余つ程辛抱強い朴念仁になるんだらう。おれには到底やり切れない。それを思ふと清なんてのは見上げたものだ。教育もない身分もない婆さんだが、人間としては頗る尊とい。今迄はあんなに世話になつて別段難有いとも思はなかつたが、かうして、一人で遠国へ来て見ると、始めてあの親切がわかる。越後の笹飴が食ひたければ、わざ／＼越後迄買ひに行つて食はしてやつても、食はせる丈の価値は充分ある。清はおれの事を怨がなくつて、真直な気性だと云つて、ほめるが、ほめられるおれよりも、ほめる本人の方が立派な人間だ。何だか清に逢ひたくなつた。

(四)

問題は「坊っちゃん」が清の「価値」を認識するプロセスが、教育に失望するプロセスに重なっていることだ。

中学校に赴任する以前、学生時代の「坊っちゃん」は、教育に対

してむしろポジティブな価値観を持っていた。

おれは六百円の使用法に就て寐ながら考へた。商買をしたつて面倒くさくつて旨く出来るものぢやなし、ことに六百円位の金で商買らしい商買がやれる訳でもなからう。よしやれるとしても、今の様ぢや人の前へ出て教育を受けたと威張れないから詰り損になる許りだ。資本杯はどうでもいい、から、これを学資にして勉強してやらう。六百円を三に割つて一年に二百円宛使へば三年間は勉強が出来る。三年間一生懸命にやれば何か出来る。

(一)

父の死の直後に私立の中学校を卒業した「坊っちゃん」は、九州に赴任することが決まった兄から遺産の分け前六百円を渡されて、それを教育に投資することを選択する。「人の前へ出て」「威張れ」るようになる、つまり社会の上層部に昇りつめるためには学校教育を受けて社会的な価値を担保することが必要だと判断したのである。その結果「坊っちゃん」は「社会の上流に位する」(一六) 中学校教師という地位を獲得することになる。この時の「坊っちゃん」の価値観は、学歴のピラミッドを登ることでエリートとして上昇することを目指す、赴任先の中学生と何ら変わりなかったといつてよい。

そのような価値観に立っていた当時の「坊っちゃん」は、清につ

いても中学校赴任後とは全く別の評価を下していた。父が兄ばかりを依怙最良すると思ひ込んで「坊っちゃん」にだけ物をくれたいた「坊っちゃん」が少年時代の清の行動に対して、「元は身分のあるものでも教育のない婆さんだから仕方がない」(一七)と評していたように、学校教育の有無という評価軸によって否定的に価値付けていたのである。

教師になる以前のそうした清への評価は、「赤シャツ」や生徒たちとの関係の中で「坊っちゃん」が学校教育への疑問を抱き、失望感を強めていく中で、「教育もない身分もない婆さんだが、人間としては頗る尊とい」というように逆転する。注目すべきは、学校教育への失望を媒介にした清の「人間として」の「尊」さの発見が、「清はおれの事を慾がなくつて、真直な気性だと云つて、ほめるが、ほめられるおれよりも、ほめる本人の方が立派な人間だ」というように、「人間として」「頗る尊とい」清にほめられる「慾がなくつて、真直な気性」の「おれ」という形で、「坊っちゃん」自身の「人間的」「価値」を相互媒介的に保証することになっていることだ。

この学校教育の無効性とその対極にある「教育」のない清の「人間的」価値という二項対立の枠組みは、教師体験を振り返る形で語られた「坊っちゃん」という回想体小説全体を価値付ける評価軸を形成することになる。

亀井秀雄は「坊っちゃん」の中学校赴任以前の記述に、四国での体験を経た後の「坊っちゃん」の認識が過及的に反映されていることを指摘しているが、進学先を選ぶ際の「学問は生来どれもこれも

好きでない」から「どうせ嫌なものなら何をやつても同じ事」(二)だと思つて物理学校に入学したという、勉強嫌いを強調するような記述や、物理学校時代の「三年間まあ人並に勉強はしたが別段たのしい、方でもないから、席順はいつでも下から勘定する方が便利であつた」(一)という、劣等生振りを誇張するような物言いには、教師生活における学校教育への失望が反映されていると見ることが出来る。小野一成が指摘しているようにこの当時物理学校は進級、卒業が非常に難しいことで知られており、三年間ストレートで卒業できたのは全体の一、二割に過ぎなかつたので、「坊っちゃん」は実際には相当な優等生だつたはずである。にもかかわらず「坊っちゃん」がことさらに自分を劣等生であるように語るのには、学校教育の無効性とそれを反転させた無教育ゆえの人間の価値という、「赤シャツ」や生徒と清を対比させた評価の枠組みがそこに反映させられているからである。「坊っちゃん」は劣等生であることを自己顕示することによつて、「赤シャツ」や生徒を差別化し、清に同一化するのである。

7、^{アンチ}反・学園ドラマから元祖学園ドラマへ

「坊っちゃん」という作品は、この一点において元祖学園ドラマへと反転する。これまで検討してきたように、「坊っちゃん」は物語的な枠組みや登場人物の性格設定、作中の人間関係等において、表面的には一連の学園ドラマと強い共通性を有していたが、教育の

可能性と成長という物語のテーマにかかわる部分では、逆に強い異質性を持つていた。その意味で「坊っちゃん」は、学園ドラマの祖型でありながら本質的には反・^{アンチ}学園ドラマといふべき作品だつたのである。にもかかわらず、映画化やテレビドラマ化にも見られたように「坊っちゃん」はしばしば学園ドラマとして読まれてきた。そのような読みを可能にしていたのが、学校教育の外部に人間的な価値があるという「坊っちゃん」の語りを支える価値認識の枠組みなのである。

中学生という学歴エリートを教え子とする「坊っちゃん」では、頭の固い学校の管理職に型破りの新任教師と劣等生の生徒たちが対峙するという、学園ドラマ型の対立の構図は形成されない。「坊っちゃん」では一連の騒動の後に成立するのは、学歴エリートである「赤シャツ」と「赤シャツ」予備軍の生徒というグループに、「教育のない」清と劣等生の「坊っちゃん」が対立するという構図である。学園ドラマとは反対に、「坊っちゃん」では生徒たちは主人公と対立する敵役的位置に置かれている。しかし、対立の構図にはそのような決定的な違いがありながら、権力者・エリートと不良・劣等生という二項対立の図式において、「坊っちゃん」は学園ドラマに通底しているのである。学校の管理職対新任教師と生徒たちという学園ドラマの対立の構図は、学校教育の外部に本来の人間教育があるという物語を提出する。同じように「坊っちゃん」は、「坊っちゃん」の教師体験による学校教育への失望を通じて、学校教育の外部に本来の人間の価値があるという物語を提出しているのである。

よく知られているように、漱石は「文学談」⁽²⁾という談話の中で「坊っちゃん」について、「人が利口になりたがつて、複雑な方ばかりをよい人と考へる今日に、普通の人のよいと思ふ人物と正反対の人を写して」「諸君が現実世界に在つて鼻の先であしらつて居る様な坊っちゃんにも中々尊むべき美質があるではないか」ということに読者の注意を向けさせることに作品の趣意があつたのだという意味のことを語っている。「僕は教育者として適任と見做さるゝ狸や赤シヤツよりも不適任なる山嵐や坊っちゃんを愛し候」という大谷繞石宛の書簡⁽³⁾中の言葉を併せて考えれば、「教育者として適任と見做さるゝ」「狸や赤シヤツ」をネガとして、「坊っちゃん」の「尊むべき美質」が作り出されていることが了解されるだろう。個人の評価が学校教育のヒエラルキーによってなされる学歴社会の価値観を反転することで、「坊っちゃん」の人間の価値が創出されていたのである。同時にそのような反転には「人が利口になりたがつて、複雑な方ばかりをよい人と考へる今日」、「諸君が現実世界に在つて鼻の先であしらつて居る様な坊っちゃん」というように、学校内部の問題を越えて現実社会一般に対する批判の意味が与えられていた。

明治四〇（一九〇七）年前後は学校を舞台とし教師を主人公とするという意味での「学校小説」⁽⁴⁾が集中的に書かれた時期である。「坊っちゃん」と同じ明治三九（一九〇六）年に限つても、島崎藤村の「破戒」や石川啄木の「雲は天才である」⁽⁵⁾が書かれている。これらの「学校小説」について千田洋幸は、「主人公がいずれも学校という空間から逸脱してゆく教師、あるいは異分子としてあつかわ

れる教師であつたこと」、彼らが一樣に「学校という制度への批判を体现する人物としての意味を付与されており、逆に、校長、教頭といった学校ヒエラルキーの上層部を形成する人物たちは、これら反権力的な教師たちを排除する悪役的な役割をになわされている」という共通する特徴を持つていたことを指摘し、「学校という空間をひとつの〈社会〉に見立て、そこに権力者／被抑圧者というステレオタイプを設定して後者の正当性を強調しようとするのが、これらの小説におけるほぼ共通したイデオロギーであつた」と述べている。

学校教育への批判を通じて現実社会への批判的なポジションを獲得しようとするこれらの「学校小説」が志向していたのは、学校教育の外部としての人間教育を担う「文学」の社会的価値の構築である。「破戒」や「雲は天才である」と「坊っちゃん」には、主人公の教師と生徒の関係のあり方や教育への姿勢という点において、正反対ともいえる違いがあつた。⁽⁶⁾しかし、学校教育の外部に人間の価値を見出していくその構造において、一連の「学校小説」は同じ特性を持つていたのである。⁽⁷⁾

「坊っちゃん」以降、漱石は「野分」「三四郎」「こころ」などの作品で、繰り返して学校教育の無効性と、その外部にある人間的価値、人間教育の可能性を語つていくことになる。⁽⁸⁾大学という学歴ピラミッドの頂点に位置する学校組織の教員を辞めて、新聞社の専属作家という「文学」へと転身するという作家自身の行動と相俟つて、学校教育の外部に位置する「人生の教育者」という「文学者」のポ

ジションが作り出されていくのである。

「学校小説」における教育の現状への批判や失望感の表明は、学校教育の社会的価値の否定を意味しない。学校教育の外部に真の人間教育を発見しようとする身振りは、学校教育の社会的価値を前提にして始めて意味を持つのである。「学校では教えてくれないこと」の価値は、学校教育の価値を前提にした上で、それを反転することによって作り出されている。反・学園ドラマである「坊っちゃん」の元祖学園ドラマへの反転が意味していたのは、そのような学校教育と「文学」の相互媒介的な価値の構築における共犯関係だったのである。

注

- (1) 「国民文学」という観点から「坊っちゃん」を批判的に検証した論文に生方智子「国民文学としての『坊っちゃん』」(『漱石研究』九号、一九九七年一月)がある。
- (2) 伊藤整「解説」、『現代日本小説大系第一六巻』、河出書房、一九四九年、四一―四二頁。
- (3) TBS系、小山内美江子・重森孝子・岡本克己脚本、竹之下寛次・佐藤藤一・高島豊・生野慈朗演出、一九七九年―一九八〇年。
- (4) フジテレビ系、遊川和彦・菅良幸脚本、赤羽博・中島悟演出、一九九八年。
- (5) TBS系、秦建日子脚本、塚本連平・唐木希浩・小松隆志演出、二〇〇五年。
- (6) TBS系、飯野陽子・いずみ吉紘脚本、今井夏木・三城真一・加藤新・山室大輔演出、二〇〇三年。

(7) 学園ドラマについては、中野綾子「なぜ取り調べにはカツ丼が出るのか? テレビドラマと日本人の記憶」(株式会社メディアファクトリー、二〇一〇年)を参照した。

(8) 一九八〇年五月三日改版。引用は一九九八年五月二五日付けの百八刷に拠った。

(9) 平岡敏夫「坊っちゃん」試論―小日向の養源寺―(『文学』三九巻一号、一九七一年一月)など。

(10) 中野綾子「なぜ取り調べにはカツ丼が出るのか? テレビドラマと日本人の記憶」、株式会社メディアファクトリー、二〇一〇年、一四―一頁。

(11) イニシエーションをキーワードに「坊っちゃん」を論じた著書に島田裕巳「誰も知らない『坊っちゃん』」(牧野出版、二〇〇八年)がある。「坊っちゃん」を学園ドラマ風の青春小説として読んでしまうこととの「ウソ」(同書帯の言葉)を指摘している点など、島田の著書には本論と重なる所も多い。ただしそのような指摘それ自体はいくつかの先行論文ですでに言及されてきたことである。島田論のオリジナリティはイニシエーションという概念を使ってこれまで指摘されてきたそれらの問題を検討、整理した点にあるが、本論の目的は、島田論も含めてすでに指摘されてきたそのような「坊っちゃん」の反・学園ドラマ的な特徴それ自体を問題にすることにあるのではなく、反・学園ドラマである「坊っちゃん」を学園ドラマとして読ませしてしまうこの作品の構造と、そのような読み替えによって起きる「文学」と学校教育の相互媒介的な価値形成のシステムについて明らかにする点にある。

(12) もちろん「山嵐」は「坊っちゃん」以外のだれにも知らせずに、密かに「赤シャツ」の芸者買いを暴くために宿屋で張り番をしていたのだし、「坊っちゃん」も「赤シャツ」と「野だ」に「天誅」を加えたその日のうちに「山嵐」とともに任地を去ってしまうのだから、生徒が二人を見送りに来ることは物理的に考えても現実には難しい。しかしいきなり辞表を郵送して辞めてしまう「坊っちゃん」はともかく、

「山嵐」の辞職は生徒たちにも伝わっていたはずであるにもかかわらず、それに対する生徒たちの反応は、作品には一切語られていないのである。

- (13) 川島至は「学校小説としての『坊っちゃん』」(三好行雄・平岡敏夫・平川祐弘・江藤淳編『講座夏目漱石第二巻(漱石の作品(上))』有斐閣、一九八一年、一一八頁～一九九頁)で、一九五八年公開の番匠義彰監督作品と一九七七年公開の前田陽一監督作品の二つの映画版『坊っちゃん』について、ラストシーンが同じように「船中の坊っちゃん」と山嵐が、二人を慕って岸辺に集う大勢の中学生たちの見送りの歓声に、いつまでも手を振る」形に改変されていることを指摘し、「映画の製作者は、主人公が多数一般の観客に愛されるように、どこかで坊っちゃんの教師としての像の変容を企図しているように思われる」と述べている。

- (14) NHK、内館牧子脚本、大原誠演出、一九九四年。

(15) 衝突と対立をイニシエーションとする理解と連帯の成立という図式ではなく、同僚である「山嵐」と「坊っちゃん」と生徒の間には、「坊っちゃん」では、新任教師である「坊っちゃん」と生徒の間ではなく、同僚である「山嵐」と「坊っちゃん」の関係ではなく、教頭の「赤シヤツ」に對抗する「山嵐」と「坊っちゃん」の関係という、職場の上司、同僚との関係の方に当てられていることを意味している。職場としての学校における教員間の人間関係の前景化は、学校を舞台とし教師を主人公とする同時期の「学校小説」にも共通して見られる性格であり、「学校小説」がこの時期集中的に書かれたことの問題として、中等教育を受けた、特に文科系の学生のライフ・コースの問題として、教師という職業が注目される状況があったと考えることが出来る。その意味でも一連の「学校小説」は、「文学」と「文学者」の社会的な価値が形成されていくプロセスを考える上で重要な問題を有しているといえるが、それについては別稿を立てて改めて論じた。

- (16) 日本テレビ系、鎌田敏夫・永原秀一・上條逸雄・須崎勝彌・田上雄・

田波靖男・木村佳世・武田宏一・鴨井達比古脚本、高瀬昌弘・土屋統吾郎・石田勝心監督、一九七二年～一九七三年。

- (17) 日本テレビ系、鎌田敏夫・上條逸雄・桜井康裕・高瀬昌弘・須崎勝彌脚本、高瀬昌弘・土屋統吾郎監督、一九七四年。

- (18) TBS系、いずみ吉紘脚本、平川雄一朗・武藤淳・山本剛義・中前勇児演出、二〇〇八年。

- (19) 日本テレビ系、江頭美智留・横田理恵・松田裕子脚本、佐藤東弥・大谷太郎・高橋直治・渡部智明・山下学美演出、二〇〇二年～二〇〇八年。

- (20) 『日本近代教育百年史4 学校教育』、教育振興会、一九七四年、一〇八二頁。

- (21) 『日本近代教育百年史4 学校教育』、教育振興会、一九七四年、一〇八四頁。

- (22) 石原千秋『坊っちゃん』の山の手、初出『文学』五四巻八号、一九八六年八月、『反転する漱石』青土社、一九九七年、二二頁。

- (23) 西村好子『反・学校小説『坊っちゃん』』(『国文論叢』二九号、二〇〇〇年三月、五六頁)に「赤シヤツ予備軍の『狡児』たる中学生」という表現がある。

(24) ドラマ化された『坊っちゃん』で、ほとんどの場合、中年の俳優によって「赤シヤツ」が演じられているように、「赤シヤツ」の年齢は高く見られる傾向がある。しかし中学校に通っている弟がいることから推測すれば、「赤シヤツ」は青年と呼ぶべき年齢であったと考えるのが妥当であろう。「うらなり」の父が「去年」亡くなって古賀家の財政事情が悪化しているところに「赤シヤツ」がやってきて「マドンナ」に結婚を申し込んだのだと「萩野の御婆さん」が言っていたことからすれば、「赤シヤツ」がこの土地にやってきたのはごく最近であり、恐らくは大学卒業後間もなく赴任したのではないかと考えられる。そうだとすれば「赤シヤツ」の年齢は二十代の後半であり、「山嵐」や「うらなり」とは同世代であった可能性が高い。この設定は大学卒業後大学院を経て松山中学に赴任した漱石自身に重なっている。

- (25) 「教育もない身分もない」清の価値の再発見は、もう一方では「身分」、すなわち「瓦解」以前は「由緒のあるものだった」(一)という清と「元は旗本」(四)という「坊っちゃん」の自己同一性を結びつけ、任地の不愉快な人間関係で自己を差別化するもう一つのよりどころの発見でもある。このことについては「世の中の実験―坊っちゃん論―」(『國語國文研究』七八号、一九八七年九月)、「坊っちゃん」の松山、「三四郎」の熊本(『国際文化学部論集』二巻一、二〇〇二年四月)ですでに論じた。
- (26) 木股知史は伊藤左千夫の『野菊の墓』等を例に、明治期に「知への上昇のために懐かしい共同体から離れるという(知恵の悲しみ)型の物語」が生産、受容されていた事実を指摘している(『水仙の作り花』をどう読むか―「たけくらべ」の結末、『日本文学』四七巻一、一九九八年一月、一七頁)。「教育」のない清の「人間」的「価値」は「知恵の悲しみ」型の物語」において「知への上昇からこぼれ落ち、取り残される者」に与えられている「無垢のイメージ」(木股知史「制度と無垢の間―日本近代文学における子供」、『日本文学史を読む』五巻、一九九二年、二五九頁)に通じており、学歴エリートを養成する学校教育のありように失望し、「教育」のない清の「人間」的「価値」を発見することによって、教員を辞職して清のもとに回帰する、という「坊っちゃん」のプロットは、この「(知恵の悲しみ)型の物語」を反転させた形になっていることができる。
- (27) 亀井秀雄「坊っちゃん―「おれ」の位置―「おれ」への欲望、『國文學 解釈と教材の研究』三七巻五号、一九九二年五月、四八―四九頁。
- (28) 小野一成「坊っちゃん」の学歴をめぐって―明治後期における中・下級エリートについての一考察―、初出「戸板女子短期大学研究年報」二八号、一九八五年一〇月、『漱石作品論集成第二巻坊っちゃん・草枕』桜楓社、一九九一年、二二頁。
- (29) 夏目漱石「文学談」、「文芸界」、五巻九号、一九〇六年九月。引用は『漱石全集 第二五巻』(岩波書店、一九九六年)に拠る。
- (30) 一九〇六年四月四日付け。引用は『漱石全集 第二三巻』(岩波書店、一九九六年)に拠る。
- (31) 川島至「学校小説としての『坊っちゃん』、三好行雄・平岡敏夫・平川祐弘・江藤淳編『講座夏目漱石第二巻(漱石の作品(上))』(有斐閣、一九八一年)。
- (32) 千田洋幸「告白・教室・権力―『破戒』の構図―」『東京学芸大学紀要(人文科学)』四八号、一九九七年二月、三三三頁。
- (33) 平岡敏夫は「坊っちゃん」試論―小日向の養源寺―(初出『文学』三九巻一、一九七一年一月、「坊っちゃん」の世界」堀書房、一九九二年、四五―四九頁)で、「坊っちゃん」と「雲は天才である」における教師像はきわめて対照的である。「『破戒』と『坊っちゃん』は教師小説としても非常に異なる作品である」として、教師と生徒の関係における「断絶」と「連帯」に、「坊っちゃん」と「雲は天才である」「破戒」との相違を見ている。
- (34) 千田洋幸(告白・教室・権力―『破戒』の構図―)『東京学芸大学紀要(人文科学)』四八号、一九九七年二月、三五四頁)は「教師―生徒という位置関係を固定させたまま、一方向的なコミュニケーションをむすぼうとする志向性」において「破戒」、「雲は天才である」、「坊っちゃん」の三作品は「生徒に対する好悪の感情にかかわらず」共通していると述べている。千田はこうした「欠如としての(教育)」が「彼らを排斥しようとする校長たちなど権力者の存在によって隠蔽され、彼らにはむしろ反権力的・反制度的な教師としてのイメージが付与されてしまう」ところに「文学テクストにおける(教師という制度)の誕生」を見ている。
- (35) この点については「夏目漱石研究―日露戦後社会における文科大学生のライフ・コースの変化と「文学」および「文学者」の社会的価値の成立をめぐって―」(『科学研修福祉社会研修成果報告』、二〇〇四年一〇月)ですでに論じた。

* 「坊っちゃん」の引用は「漱石全集 第二巻」(岩波書店一九九四年)に拠り、章番号を付した。ルビは省略した。引用文中の傍点は、原文にあるものは「、」で、引用者によるものは「・」で示した。